

報告（１）

「２１世紀型教育と学校改革」

香里ヌヴェール学院 学院長 石川 一郎

学校改革にはどんなことが必要か？ お隣の先生とペアワーク

１．一般的な学校改革とその行き詰まり

- ・東大、京大など国公立、難関私大への合格者数を伸ばしたいが、定員は増えないので私学の「椅子取りゲーム」になっている。勉強を徹底的にやらせるのも限界がきている。
 - ・スポーツで名をあげたいが、大規模私学以外は資金面で困難。しかも部活に力を入れるのは今後難しい。部活を学校からどう切り離していくのが今後の流れになっている。部活での生徒集めは特にカトリック校では無理がある。
 - ・多様なコース制をとりたいが、カリキュラムの複雑化、人材難となり最終的には資金難になる。
 - ・広報戦略として、「共学化」はあるが、一回しかカードはきれない。カトリックの女子校、男子校に流れている空気が一気に変わってしまい、別の学校になってしまうおそれがある。
- 学校改革は仕掛けている学校が必ずしも当たるわけではない。

２．カトリック校のブランドと現実乖離

- ・地域ごとにあるカトリック学校は、悪い学校というふうに見られることはなく、むしろ「いい学校」というイメージがある。富裕層へのミッションブランド、全人教育は魅力であったが、その富裕層のお金の使い方、質的变化によりミッションブランド、全人教育に関心をしめさなくなってきた。（現代的価値観への変化）
- ・学校選択の第三極ポジションとして、地方ではまず公立のトップ校を目指し、次に公立の二番手校か私立のトップ校で、次の第三の極にあるのがカトリック校であった。トップ校に行けないのならカトリック校に行かすのは一つの選択肢であったが、人口の減少によって、第２極まででかなりの受験生が収まってしまうようになったので、カトリック校に目を向けてくれる人が少なくなってきた。いい学校で子供たちは満足しているんだけど、だんだん生徒が減っていくという状況になってきた。
- ・カトリックの学校は基本外国の方によって設立されたので、英語教育は強いと思われていたが、本当に強いのだろうか。

ブランドと実際との違いは？ ペアワーク

3. 関西2校の学校改革（香里ヌヴェールとアサンプション国際）

カトリックだというアドバンテージがあるとして、ではそこで何をすればいいのか。

関西初、21世紀型教育の導入を2校同時に行ったので、香里ヌヴェールとアサンプション国際の生徒数は倍に増えた。2校とも共学化だけでなく校名も変更し、同時展開によるインパクトはあった。さらに、今年度より人事交流も行い活性化を図っている。そして一番のポイントは、21世紀型教育の導入が、カトリックの教育とどういう関係になっているのかということである。

21世紀型教育とは？

PBL (PROJECT BASED LEARNING)

新しい学びの手法導入ではなく、教育理念 (WHY) である。

ミッションベースのPROJECT～神様からいただいた命を人がどう生かしていくのか～ということがPBLの原点になる。いただいた命、才能をどうやって人のために使うのかということ。そういう意味でPBLはカトリックの教育と合致出来るものであり、カトリックの原点である。日本にきた宣教師たちが学校を創設したころには、決して進学校にしようという意図はなかったはずであり、世の中に送り出した子どもたちが、世のため、人のための行いをすることによってカトリックの教えが伝わっていくように願って学校を作ったという原点に返っていくと思われる。PBLは知識の暗記といった受け身の学習から脱却し、自ら問題を発見、解決していく能力を身につけることを目的とする教育である。詰め込み教育ではなく、考えるには知識が必要だが、その知識をどう使うのか、生かすのかという学習方法である。ただアクティブラーニングとはその中でも狭い学習のあり方なのでそれを目指しているのではない。

MEN FOR OTHERS～他者のために何ができるのか

より良い自分を目指していくのはもちろんだが、社会貢献をしたい、人のために何かをしたいということを考える子どもも多くなっている。ただその時に何をしたらよいかわからないが人からの感謝がほしい若者は多い。では何をやるのか、それを見つける場が学校であり、より良い大学を見つける場ではない。何かをやるということに対していい場所がより良い大学である。

4. 価値観の変化

40歳以上の方は努力して我慢したら、いつかは良くなるという右肩上がりマインドがあるので、子どもたちには達成感を求めてしまう。「より良き価値観」を好むが、40歳未満の人は低成長マインド、つまり今日より明日の方が良いという教えはあまりなく、不安なことを言われても居場所感を強く求める。また、承認欲求も強く、特に教員には年齢関係なくそれが強く、認められたい人が多い。生徒にも「努力をなさい、そうすれば～」を言い続け、最優秀な生徒が集まっているとは限

らないカトリック校の生徒には、その言葉に抵抗を感じ疲れてしまう。

しかし、承認欲求が満たされると今度は人のために何かをしようとなるのが今の若者のいいところでもある。価値観の併用をうまく受け止め、若者に自己肯定感、「あなたをまず認めてあげましょう」それも家族、友達の中で認められることよりも、学校の中で、クラスの中で自分の役割、働きを認めてもらうことが重要であり、そこで安心感があれば、次の社会貢献マインドになってくる。

5. S D G s (グローバルゴールズ)

社会貢献マインドになれば、具体的に何をするのか、これがプロジェクトになる。何をするのか、今は社会貢献の具体的なコンテンツが示されている。それがS D G s (グローバルゴールズ)である。2030年までに解決しなければならない項目を国連が17項目挙げている。これに関連することであれば明らかに社会貢献になり、これから生きて行きてゆくために必要な具体的なことを子どもたちに示せる。

6. P B Lに必要なこと

知識、ものを知っていること、そして論理、ものを組み合わせること、どちらも大事である。そして最終的には批判、創造、つまり新しいものを創り出そうということだが、今まで日本の教育は、知識、論理のところだけであって、これからは、もう一歩先の批判、創造の部分が必要となる。

7. ザビエルに関する授業

例えば、フランシスコ・ザビエルについて、

「もしあなたが知らない土地へ行って、その土地の人々に何かを広めようとするならどのようなことをしますか？」このような問いかけをすれば良い、教科書には日本でザビエルが何をしたのかは載っているが、それを知っているだけでは考えられない。ザビエルだけでなく、他の国へ行ったら何をした人の例を知っていれば知っているほど考えやすくなる。そしてそこにミッション性も必要であり、人のためなら何をしていても良いのというのではない。こういう問いに対応できる子どもたちを育てていくことがP B Lの大切なところとなる。



8. C E F R

C E F Rとはヨーロッパでの言語基準であり、M F Oの考えが基本にある。

A, B, Cのレベルがあり、Aレベルは相手に聞く気があれば通じるというレベルであり、双方向にはならない。Bレベルは自分の専門のことだったら相手と話が通じるレベルであり、Cレベル

はMFOの精神もあって、専門外のことで相手と話ができる。それだけではなく、相手のバックグラウンドや細かいニュアンスもわかったうえでお互いの関係をつないでいける、双方向だけでなく、第三者、年代の違いも含め、多様な中で話ができるレベルであって、トータルな言語力である。

CEFRは基督教の精神がベースにあるので、ABCの決め方が人との関係性における基準になっている。単に英語だけを追いかけるのではなく、他のこともトータルに学ぶ必要がある。

CEFRはカトリック学校の精神に合っている言語であろう。そして、PBLとCEFR言語と宗教がベースにあるという考えをもって、21世紀型教育を展開して行くというのはカトリックの本来の姿であると言っても良いと思われる。

(報告2)

「学校法人同士の連携について」

城星学園中学校高等学校	教頭	岩城	志門
大阪星光学院中学校高等学校	教頭	宮本	浩司

(城星学園 岩城教頭より)

1. 学校法人の連携の経緯についての歴史的な話と両校の沿革

大阪星光学院は男子修道会のサレジオ会、そして城星学園は女子修道会のサレジアンシスターズの学校だが、大阪星光学院は1949年に学校設立に着手した。大阪では戦後初の鉄筋コンクリートの校舎で有名であった。城星学園は1950年、教区のガラシア幼稚園をサレジアンシスターズが委託されて設立された。

なぜこの両校が連携をしたのか、それについて欠かせないのは、1926年にサレジオ会員9名が来日したのだが、その中のアンジェロ・マルジャリア神父の存在である。

マルジャリア神父は1898年北イタリア生まれ、1924年司祭叙階、1926年初来日しており、何事にも積極的な性格から日本語を習得し、出版物による宣教も行った。その出版社が現在の「ドン・ボスコ社」である。そして、1930年サレジオ高専を設立。

サレジオ会は元々ドン・ボスコがイタリア統一運動で社会が乱れていた時、最もしわ寄せが来るのは女性、子どもたちであったので、男子を集めて始めたのがサレジオ会で、女子を集めて始めたのが、サレジアンシスターズである。そしてその時に子どもたちに何か手に職をつけさせようというのが両修道会の目的だったので、マルジャリア神父も、日本の子供たちにも手に職をつけさせようということで高専を設立したのである。現在もサレジオ高専は大学をもっていないのに存続しているという珍しい高専である。

1943年日独伊三国同盟からイタリアは離脱、その後多くのイタリア人神父は敵国人として長野県

野尻湖畔に軟禁される。しかし、マルジャリア神父は語学が堪能であったため、スパイ容疑で名古屋の収容所に入れられる。1945 年終戦、マルジャリア神父も解放され、東京へ行くが、そこで子供たちの様子に驚く。戦前の子供たちは明るく、陽気だったのに、戦後、ボロボロの服を着て、うつむき、自信を失った様子に、何とかしなければならないと思い、教育の必要性を感じ学校の設立をサレジオ会に願ったが、会には資金はなく神父は募金活動をしに渡米する。その頃、戦勝国アメリカは景気は良かったが、教会での募金活動に人々は辟易していたので、その活動はうまくいかなかった。そこで声楽家でもある神父は、コンサートをし、お金を集め、再び日本に戻ってくる。

1948 年来阪、焼け野原の大阪で現在の大阪星光学院の土地、夕陽丘の一面を取得し、1950 年学校を設立し、初代校長に就任する。その後サレジオンシスターズのシスターたちを呼び、女性を教育する学校として城星学園中高等学校を設立する。そしてこの両校が 2016 年 11 月 1 日に連携協力確認書を締結する。



2. では、なぜ連携したのか。

現在、城星学園の経営が厳しくなっている。その原因は生徒募集だが、実は幼、小は生徒は集まっている。しかし中、高は集まらない。20 年ほど前、小学校は人気がなかった。それは男子は中学から外へ出て行くが、女子はそのまま城星学園の中学に上がるようになっており、もし上がらないなら 6 年生の時点で転校するようになっていた。そんな足かせが人気を落としたので現在はその足かせをなくし、中学は自由に選べるようにした。その時に手を打っていたら良かったのだが、男子に倣って女子も外へ出て行くという状況に歯止めがかからなくなっている。厳しい状況だが、現在城星学園は、星光学院と提携することによって新しい道を歩もうとしている。その具体的な方法を大阪星光学院の宮本教頭よりお話ししていただく。

(星光学院 宮本教頭より)

現状と課題

1. 城星学園小学校から大阪星光学院中学校への特別選抜制度の実施

特別選抜入試における 3 つの重要な点

1) 特別選抜入学試験

連携の時に確約された内容であり、城星学園小学校から星光学院に何人かを特別に選抜して入学させる。大阪私学中高連の制約の中には「推薦」は認めてはおらず、あくまでも特別選抜である。城星学園小学校からの受け入れ定員は、8 名という枠を設け

た。勉強についてこられるのはもちろんだが、どちらかというとアクティブラーニング的なこと、課題学習的なことに積極的に参加できる生徒を本人保護者の面接を通して決定した。

2) チャレンジゼミ

昨年から始めた取り組みで、大阪星光学院の入試問題を城星学園の5、6年生を対象に解かせ、解説をし、また星光学院の入学の心構えなどを保護者にも伝える。女子生徒の参加もあった。

3) 合同進学説明会

城星学園の幼、小、中、高の15年間教育「はぐくみの園」を提唱。小学校の女子は城星学園中学校へ、男子は星光学院へという流れを作り、サレジオ会としての教育の実現を図る。



2. 両校の交流

1) 施設の相互利用

プール、校外学舎（和歌山県南部、長野県黒姫高原）の相互利用など

「共にいること」という教育理念のもと、生徒たちと共にいて彼らを支えることを実現するために学舎を使用しているが、昨年より城星学園の生徒にも利用してもらうことで教育理念の実践に努めている。

2) 生徒の交流

クラブの交流はもちろんだが、文化祭、クリスマスのカテドラルでの合唱、お祈り等合同で行っている。またドン・ボスコの生誕の日(1/31)にカテドラルで合同のミサも行う。また、生徒たちに様々な興味を持たせる取り組みとして、卒業生による施設見学（スーパーカミオカンデ）や土曜講座、またアデレードの学校への海外研修など城星学園の生徒にも参加してもらい交流を図っている。

3) 教職員の交流

法人としては別なので、お互いに行き来しているわけではないが、授業研究、新人研修会、親睦会など交流できるところは行っている。

3. 今後の課題

連携後の成果として選抜に関しては、入学した8名の生徒のうち成績面で厳しい生徒もいるが、クラブ活動を熱心にしており、星光学院としてはそういう生徒に来てほしかったので今後に期待している。先日の城星学園で行われた説明会にも低学年も含む

多くの保護者に熱心に聞いていただき、今後も引き続き、選抜制度は続けていかねばならないと感じている。また、小学校の募集定員も女子も含め4割ほど増えたそうである。さらに、幼稚園も2割増になった。今後は女子が城星学園中学校へ上がってくれればと願っている。

情報交換会・懇親会

